

2009年5月23日(土)9:00～13:00 於 大田儒城ホテル

第1主題をめぐって

孫承喆 それでは始めましょう。スケジュールに従って、我々第2分科会のこれまでの全ての発表が終わっていますので、今日は座談会をしたいと思います。

まず今日の進行方法ですけれども、以前合意いたしました通り、これまで発表した主題に関して、総合的に整理するという次元で、討論をしたいと思います。

3つの大きな主題で発表ということになっていますが、1主題当り大体1時間以内ということで、発表は50分程度、それから休憩が10分、また次の発表は50分、休憩10分ということで約3時間にわたって話をして、午前中に終えたいと思います。そして最後に、これから今後のスケジュールについて簡単に打ち合わせをしたいと思います。

まず討論の方法ですが、3つの主題を時代順に進行したいと思いますが、みなさんはよろしいでしょうか。それでは、最初の主題です。まず発表者は以前発表した内容に関して補足して説明する部分がありましたら、簡単に補足していただきたいと思います。補足説明が終わりましたら質疑応答に入りたいと思います。我々は前回にも発表をして討論をしていますので、できれば、これまで討論された範囲の中で再確認という形でのお話の進め方をお願いいたします。

まず、第1主題は「14-15世紀の東アジア海域世界と日韓関係(倭寇構成問題を含む)」です。この主題に関しては、研究史の観点から日本側では中田稔先生、韓国では、金普漢先生が発表されました。主題発表は、日本側は佐伯弘次先生、韓国側は私が行いました。それでは、まず佐伯先生のほうからもし補足説明がございましたら説明していただき、それから、私のほうから補足説明をしまして、その後、討論に入るということにしたいと思います。

佐伯 それでは私のほうから3点、簡単に補足説明をさせていただきます。

私のテーマは「14-15世紀東アジアの海域世界と日韓関係」というテーマですが、まず第一に前提となる国際関係、これは中国を中心とするいわゆる東アジア世界というのが、この時代の日朝、日韓関係の前提となるというのが重要です。

それでは、この時代、14～15世紀の日韓関係を、東アジア、中国中心の東アジア世界の中で全て理解できるかというところでもない点があるというのが日韓関係の特徴であると思います。それは倭寇の問題が大きな原因になりますが、特に15世紀に独自の日韓・韓日の国際関係が形成されるという点です。

第二点は、今回の一つの大きなテーマである倭寇の構成員の問題です。これにつきましては、中田先生、金普漢先生が研究史をまとめてくださいました。私もそういったものを前提としながら、自分なりに論文そして史料を見ました結果、日本における古い見解、つまり戦後の田中健夫氏、中村栄孝氏の前期倭寇の見解、つまりその主要な構成員は壱岐・対馬・松浦地方の海民達という理解が一番良いというように考えました。もちろん韓国の当時の海民達が倭寇を偽って倭寇となるという形はありますが、これがその倭寇の主流ではないということは史料

上言えるだろうと思います。

もう一つ、倭寇を捉える点で重要な点というのは、倭寇の実態をもう少し史料に即して考えるべきであるということ、倭寇と中国との関係も非常に重要ではないかということを考えております。まさに日本国内から倭寇を見るという視点と、東アジア世界から大きく倭寇を見るという視点が両方必要であると痛感しております。

最後に第三として述べておきたいのは、東アジアという枠を超えた、凄く大きな流れというものがあるということです。14世紀末から15世紀になりますと、日本そして朝鮮に、琉球とか東南アジアの船がどんどんやってきます。そのような流れを前提として、日本から朝鮮に通交する人々が東南アジア産の物資、例えば胡椒とかをもたらすということが特徴になります。従って、物の流れとしては、非常に広く東南アジアにまでおよぶ、環シナ海世界の中で日韓関係を捉えるということが必要になってくるということになります。以上です。

孫承喆 ありがとうございます。

私のほうからは、特別に補足するというよりは主題発表論文の主要内容についてお話したいと思います。倭寇の猖獗が1350年、その次に1370年代にありましたが、それはその当時、日本内部の政治的な変動と深い関連があったということをもとに考えております。それからもう一つ、従来の倭寇の構成に関しては、「高麗・朝鮮人が含まれていた」という説と、「済州島海民説」という見解がありました。まず高麗・朝鮮人説に関しまして、いわゆる「倭寇事件」は1382年と83年に江原道の寧越の「倭寇事件」を根拠としている点において少し妥当性が欠如していると考えています。それからもう一つ、「済州島海民説」に関しましては、その史料が大体1470年、1480年代の水賊事件に関連した史料なので、前期倭寇つまり1350年から1450年代をとくに過ぎているという点で、妥当性を欠いた主張だと私は考えています。

それから、現在私が倭寇の略奪形態の分析をするのに、『三綱行実図』という史料を分析しましたが、『三綱行実図』の絵を描いたのは安堅であるという事実を確認しました。以前発表した時には推測でしたが、光海君時代〔17世紀前半〕に『東国新続三綱行実図』という史料がまた出てきて、その史料の纂修依頼を見れば、『三綱行実図』は安堅が書いたものだ確認をすることができました。それから、『三綱行実図』の武器に関して分析をしましたが、前回須川先生がくださった日本の武器に関連した本を通して、『三綱行実図』に出てきている武器が、中世に日本の武士が使っていた武器と一致していたと確認をすることができました。今後、この内容を補充して論文を完成させたいと考えております。

以上で、第1主題に関しまして、佐伯先生と私の補足説明が終わりました。まず研究史、その次に発表内容あるいは今日の補足説明の中で追加の質疑応答があればご自由にしていただきたいと思います。

李啓煌 まず私から質問させていただきます。

佐伯先生の発表を読ませていただき、大変勉強になりました。先生の論文の中で、14、15世紀に朝鮮半島に現れた倭寇の中心は三島であったということを確認しております。15世紀中頃から少し変化が見え、貿易は琉球と日本との関係が中心になっているということです。こ

れに従って琉球の日本との関係において日本の偽使の派遣もとても重要な観点であると理解しました。

それだけでなく、日本と琉球の関係は上下関係として成り立っていることも十分理解いたしました。そのような過程で、一律的な冊封体制という部分より、日本と諸国、中国を除外した諸国との関係が小中華の関係であることも理解しました。この部分は、これまで冊封体制によって東アジア世界が形成され、展開してきたと判断されてきたという部分とは大きく異なり、とても新しい理論として判断できるように思います。その意味から、これまでの冊封体制論や、朝貢体制論について相対化の作業を進められたという点で敬意を表します。

この部分について私も国際関係の説明として、基本的には私も同意をしております。ただ、このような小中華概念を活用して歴史的叙述をする時、どのような長点があるのかについては、まだ正確な説明がないのではないかと思います。それから、この小中華概念を使ってこの論文を全体的に完成しているようにも見えません。

この場でこのような質問をして完璧なお答えを得られるかどうか分かりませんが、今のところのお考えでは、これまでの歴史叙述とは異なり、この小中華概念を使って歴史を叙述した時、どのような変化があると思われますか。具体的に説明をお願いいたします。以上です。

佐伯

はい。ご質問、ご指摘、ありがとうございました。

私が基本的に考えておりますのは、中国を中心とした東アジア世界というものが、冊封体制論の観点から指摘されているわけですが、それが一元的なものであるかどうかという点で疑問を持っております。というのは、中国からこの東アジア世界を見た場合には、冊封体制あるいは華夷秩序というものがこの世界を覆っている、支配しているように見えますけれども、逆に周辺の国々からこの世界を見た場合には、そうではないのではないかという疑問をも持っているからです。

私は日本史が専門ですから、日本から東アジア世界を見るという観点で見ているわけですが、日本から見た場合は実は中国を中心とする華夷秩序、冊封体制があまり貫徹していないというイメージが持っております。といいますのは、1401年、日本は足利義満によって明の冊封体制の中に入るわけですが、その約10年後には、日本は中国に朝貢しなくなり、20年以上、冊封体制の中に入らないという時期があります。明の冊封体制が隅々まで貫徹していないというのが、日本から見た場合の東アジア世界の特徴ではないかというのが一つです。これは日本を中心とした見方ですので、その基本的な見方、座標軸を琉球・朝鮮・ベトナムなどに移し、そこから東アジア世界を見ても、また違った世界が見えるのではないかとこのように考えております。

もう一つは小中華ということについて。日本だけではなくて、ベトナムとかでも中国のミニ中華世界を作り上げようとしたという指摘がありますので、単に中国を中心とした中華世界、一元的な中華世界だけではなくて、周辺の国々も同じような小さな、そういうシステムを作ろうとしたという動きはあるかと思います。ただし、その周辺の国々が作ろうとした、小中華と一応呼んでいますが、この世界と中国を中心とする中華世界が同じような質のものであるかという、そう

でもないところがあります。中国を中心としたいわゆる中華世界は、朝貢と冊封という明瞭な関係によって成立しておりますけれども、例えば日本と琉球の関係はそれほど明確ではありません。外交文書の形式的な上下関係は指摘できるわけですが、朝貢と冊封という明確な形はとっていないというのが、中国の中華世界と質的に違うところで、それを小中華と呼ぶべきかどうかという問題はあると思います。これにつきましては今後また考えていきたいと思います。以上です。

孫承喆 ありがとうございました。次に韓先生。

韓明基 はい、さきほど李啓煌先生もお話をしてくださいましたけれども、佐伯先生の発表を通じて、15世紀の倭寇問題について、より明確な史実が確認されたのではないかと思います。そこで、私はこの大きな問題よりは、この時期における韓・中・日3国間の貿易関係について少し質問したいと思います。

佐伯先生の発表によりますと、1401年に足利義満が冊封を受けて以後、1547年、第19回目の遣明船によりまして、勘合貿易に終止符が打たれたという説明がありました。ところでその間、遣明船はいろいろと紆余曲折を経てますが、その中で結局、細川氏と大内氏の派遣が主体となる貿易に変化したと存じております。私が質問したいのは、1523年の寧波の乱です。この乱は後の桑野先生の発表ともつながってくると思いますが、秀吉が明を征服した後に、寧波に行き暮らすつもりであったという話が出てきます。これに関しましては、先生が後ほどまた論文を完成される時に補足くださるようお願いできるかも知れませんが、今の状況で質問してもよいならば、寧波の乱が日本と明との関係、そして、ひいては朝鮮との関係にどのような影響を及ぼしたかという問題についての説明を伺いたいです。少し補足して質問しますと、この寧波の乱があったにも関わらず、明が日本との遣明船貿易を維持した理由はどんなものだったのかを、まずお聞きしたいです。以上です。

佐伯 今回、私のテーマは14、15世紀の問題ということで16世紀に入る寧波の乱につきましては、ほとんど言及しておりません。ご質問が出ましたので簡単にお答えいたします。

寧波の乱というのは、日本の遣明船が中国の寧波で騒乱を起こしたという事件です。これは、日本における日明勘合貿易の主導権をめぐる争いというのが原因です。先ほど、韓明基先生も細川氏、大内氏が派遣をするようになっておっしゃいましたが、まさにその時代、細川氏と大内氏が日明勘合貿易の主導権をめぐる争って、しかも同時に細川船、大内船が寧波に着いてしまうというのが直接の原因になります。細川船対大内船の抗争が現地での騒乱に拡大して、その結果として寧波の乱というものになります。その結果、日明関係は一時断絶しました。

しかし、日本側には勘合貿易を継続したいという強い欲求がありますし、明としても朝貢を促すということがありますので、最終的には関係が修復され、次の遣明船が派遣されるということになります。それが例えば日韓関係等にどのような影響を与えたのかということになりますが、この乱が起こった後、日明関係がなかなか回復できないという状況があるわけですね。その際に、日本としては朝鮮国王を仲介として日明関係を好転させようという努力をしております。そ

うしますと、この乱というのは東アジア全体に影響を与えているということになるわけです。以上です。

孫承喆 はい、ありがとうございます。前回の発表より深い討論になっているのではないかと思います。もっと深くなると、少し難しくなるように思います。一つ目の主題に関して、先生のお考えをお願いいたします。

桑野 孫先生のご発表、とても大変興味深く思いました。特に『三綱行実図』の倭寇関連記録を解説、紹介されたというところなんですけども、実は、日本のほうでは1991年に九州産業大学の長節子先生が、公開講演の形で発表されまして、「朝鮮との交流一中・近世を中心として」という公開講演を後に本にまとめられました。その中に2ページだけなんですけど、こういった具合に図を紹介して、簡単に言及されたことがあります。

私が少し気になっていますのは、この『三綱行実図』に描いてある、全部で9件の記録ですけれども、これを歴史的な史実として受け入れていいのだろうかという、つまり少しはフィクションが、物語的な要素が含まれているのではないかなと、少しその辺が気になります。つまり、『高麗史節要』、あるいは後の『朝鮮王朝実録』とかなり比べていかないと、ここまでは事実とは合うけども、ここから先は少し疑わしいというか。全部否定するつもりはないのですけれども、あくまでもこの『三綱行実図』というものが歴史書というよりも教化の書というような役割を当時は果たしていたと思うんです。ですから、この記録の内容をわれわれが本当にあった事実だと全て受け止めてもいいだろうか、そういった疑問が一つあります。

もう一つあります。後に『五倫行実図』というのが朝鮮王朝の後期に編纂されますが、それを見ますと、9件のうちの3件、崔氏が怒って罵るという話と、それから烈婦が川に入るという話と、3つ目が、林氏が足を切られるという話が、後の朝鮮王朝後期ですと『五倫行実図』には残るんです。なぜこの3つが残って、残りの6件が排除されたのか。もしこれからの先のことでいいのですけれども、ご存知であれば、なぜこの3件が残ったのかなというところが、時代がちよっとずれてしまうのですが、朝鮮前期から朝鮮後期に時代はずれてしまいますが、後々になぜこの3つが残ってしまうだろうかというのが少し疑問に思っています。

孫承喆 質問3つあったかと思えます。まず長節子先生が書かれたものですが、紹介程度ですけれども、私は今日初めて見ました。ここでは絵に関する説明があるということを確認しておいて、帰りましてから、もう少し綿密に検討したいと思えます。

それから2つ目の質問ですが、『三綱行実図』は当時の民を教化するために作られたテキスト的な性格を持った本なので、歴史事実から教育用に少し変わっているのではないかと、歴史事実としての価値をどのくらい認定できるのかという質問だったと思います。私もそのように考えまして、発表する際には一つ一つ事件に関して事実確認するために、『高麗史節要』をすべて確認しました。この9件に関連した内容が『高麗史節要』に全て書かれていました。同時に、『高麗史節要』には具体的な内容までも記録されていますので、事実自体としては疑うことはありません。しかしそれがどれくらい誇張されているのかは検討する必要があるのではないかと考えております。

最後の質問ですが、朝鮮時代には、全部で5件の「行実図」が発行されています。最初のもので『三綱行実図』、その次が『続三綱行実図』、『二倫行実図』、その次に、『東国新続三綱行実図』、その次に『五倫行実図』です。私は最近この5種類に登場する日本に関連した「行実図」を全て整理していますが、私も同じような疑問を持っています。なぜある本にはこの内容があって、ある本にはないのか。基本的には、三綱と五倫が違うために、三綱には忠・孝・節で、五倫には君臣有義、夫婦有別、長幼有序などと、何かそのような関係で、編集上少し差が出てきているのではないかと考えています。その点に関しては、今後確認をして、次に共同研究報告書を完成させる時にその部分まで言及できるようにしたいと思います。大変重要なお指摘、ありがとうございました。

須川 最後の一つ、質問させてください。孫先生のご報告の中で、高麗の末期、既に倭人が居住していたと、南のほうにですね、そういうような指摘がございました。『高麗史』でしたか、『高麗史節要』でしたか、記録を挙げておっしゃっていました。なぜその時期に、特にその倭寇がですね、跳梁している時期に、高麗政府がなぜ倭人がそんなところに住んでいるのを認めていたのだろうか、あるいは高麗政府の国土意識というか、領域意識というのは、どういうものだったのか、おそらく北方のほうに行けば女真の人間もかなりいるような地域があるはずですから、高麗が自分達の国家を複数のいろいろな民族集団にまたがる帝国であるというような意識を持って、ですから、倭人が南のほうにちょこっと住んでいたりするのでも許容していたのだろうか、いろいろ考えてみるですけれども、私にはどうも答えが出てきません。是非教えていただきたいと思っています。

孫承喆 それは大変難しい質問です。最近、この部分については、東京大学の村井章介先生がその地域に住んで活動をしている人達を「マージナルマン」いわゆる「境界人」とする学説を提示し、それが広く通用していると思われます。私もこれについて具体的に研究をしていないのですけれども、私の今のところの考えでは、多分14世紀、15世紀の領土意識、国境意識というのは今はかなり違うのではないかと思います。したがって必要によって、生活居住空間がかなり包括的で幅広く分布していたのではないかとこのように考えております。例えば、済州島だとか巨濟島だとか、南海岸の一部の島に倭人が居住した痕跡を見つけることもできます。ですけれども、倭人の住居の痕跡というのが一時的なものか、あるいは長期的なものなのかというのを分析する必要があるかと思っています。ただ、その時期は、倭寇が東アジア海域のあちこちで略奪をしていた時期でもありますので、それは長期的な居住というよりは、一定の拠点として、その時その時の略奪のための拠点として一時的に利用されたのではないかと、というのが私の見解です。以上です。

他に質問がなければ、ここで少しまとめに入り、第1主題に関してはおしまいということにしたいと思います。

第1主題ですけれども、14、15世紀の東アジア海域世界と韓日・日韓関係、特にご存じのように倭寇の構成問題、これが歴史的な争点でもありました。われわれのこれまでの共同研究の結果として得られました一つの成果として、倭寇の構成問題に関しまして、かなり近い見解

を持っているのではないかということです。

ですから、高麗人、朝鮮人が倭寇に含まれる、あるいは濟州島の海民が倭寇に含まれるという従来の学説がありましたが、彼らが倭寇の構成員が主流ではないということが確認されました。もちろん、もう少し深く研究をしなければなりません、倭寇に関連しまして研究史を整理し、あるいは主題論文を通して共同してこのような成果が得られたというのは大変意味があったのではないかと思います。そしてまた新しい研究テーマとしましては、東アジアの冊封体制に関連しまして、もう少し各国の立場で精密に検討する必要があるのではないかと、また、小中華というものの内容と究明ということだとか、あるいは日明関係における勘合貿易、ないしは日明関係に日朝・朝日関係が活用されていた、などなど、新しい研究テーマとしてこれから持続的に研究しなければならないのではないかと、これもやはり一つの成果だったのではないかと思います。私のほうからは以上ですけれども、何か付け加える内容があれば…。それでは、第1主題の座談会を以上とします。

第2主題をめぐって

孫承喆 それでは、第2主題についての座談会を始めたいと思います。2番目の主題は、「東アジア世界と壬辰倭乱(国際関係と原因問題を含む)」となっております。

この主題に関する研究史を、韓国側は盧永九先生が、日本側は中野先生が発表してくださいました。主題の発表については、桑野先生と李啓煌先生が発表してくださいました。それでは、まず、主題の発表に関連する補足説明をお二人の先生方から簡単にお聞きして、討論に入りたいと思います。

李啓煌 私のほうから先にお話いたします。私はまず、壬辰倭乱に関連する、韓日の壬辰倭乱の原因論について発表いたしました。以前に私は、壬辰倭乱についての話を前提とした本を書いたことがあります。問題は、壬辰倭乱が豊臣政権論と非常に密接な関係を持っており、そのような意味で豊臣政権についても大きな関心を持っており、壬辰倭乱の関係でいろいろと調査をしながら最も強く感じたことは、壬辰倭乱に関する叙述は大変多いのですが、壬辰倭乱の原因について、正確にこれだ、という内容に関する研究が実は明らかになっておりません。特に韓国においては、壬辰倭乱の原因に対する正確な理解が非常に少なく、十分ではないように思われます。韓国の学界におきましても、その大部分が壬辰倭乱の原因については、日本の学界の学説を引用している場合が多いです。みなさんご存じのように、韓国における日本史の研究は非常に少ないです。そこで、壬辰倭乱の原因論についての研究をより正確に分析することが重要ではないかと考えたのです。特に、日本におけるさまざまな壬辰倭乱の原因についての研究が、どのような立場で、何を志向しているのか、という側面についての理解はとても重要だと思います。日本の場合でも、実は、壬辰倭乱の原因論についての議論が、1980年代を最後に、ほとんど行われていないという状況があります。特に、壬辰倭乱の原因論についての整理も、以前の段階で研究された内容についての問題点を並列的に叙述しているだけで、それに対する志向点とでもいうものは、ほとんど叙述されておりません。そこで私は、壬辰倭乱がどのような意味を持ち、このような問題をどのように考えるのかということについて関心を持ち、それに従って壬辰倭乱原因論を分析しました。

そのような過程で、日本では普通に紹介されている2種類の学説、様々な学説があるのですが、この2種類の学説はもう少し是正されなければならないと考えています。このような原因論を分析する理由は、この原因を正確に分析することにより、壬辰倭乱を正確に理解する一助となるであろうという目的を持っているからです。特に壬辰倭乱は、韓国と日本の問題ではなく、東アジア全体にわたる問題として、東アジア史的な視点がとても重要であると思われま

す。そのような意味で、さらに原因を正確に理解することは、非常に重要であると思います。この問題は、今後の私の研究成果、研究方向とも関連いたします。そこで、この問題を分析したところ、結果は満足するほどのものではありませんでしたが、それなりの成果は得られたの

ではないかと思えます。今のところ、壬辰倭乱の原因についての私自身の見解はありませんが、ある程度の方向性は得られたのではないかと思えます。そこで、今後もこの問題をより深く掘り下げていきたいと努力してまいります。以上です。

孫承喆 ありがとうございます。桑野先生。

桑野 私は昨年8月23日に晋州で中間報告をやりました。その時の結論に相当するものが、実は昨年12月の下旬にニューオータニで開かれましたシンポジウムの報告です。その時に報告した内容が実は結論になっています。

当初、昨年8月時点では結びのところでは、文禄・慶長の役以後に明、朝鮮、琉球、日本がどのような方向に進んでいくのかということ展望するつもりでした。その時にはメモ程度に、明の場合にはこの文禄・慶長の役によって明軍は援軍を派遣しましたので、それによって財政破綻が起きまして、やがて明清交代が起きると、この明清交代のことを「華夷変態」とも言っております。

朝鮮の場合にはその後、戦後10年過ぎた頃に丁卯・丙子の胡乱で、後金、後の清ですね、清軍の侵略によりまして、後に朝鮮では小中華意識が高まっていくという、そういった方向をたどっていきます。

琉球はこれも戦後、文禄・慶長の役以降ですが、薩摩藩が琉球に侵略することになりまして、結局、琉球は清と日本に両属するような形になり、琉球国王は琉球使節として江戸に上っていく。謝恩使とか慶賀使とかいいますが、そういった一種の属国扱いを受けることになります。

日本の場合にはその後、徳川幕府が明と国交回復をやろうとするのですが、それは挫折することになります。しかし、貿易はいわゆる「四つの口」といまして、例えば薩摩を介して琉球と貿易をやる、長崎を介してオランダ方面との貿易、それから対馬を介して朝鮮との貿易というふうには、明との国交回復には失敗するのですが、東アジアとの貿易が全てなくなったというわけではない。もう一つは、松前を介してのアイヌとの貿易になります。

朝鮮半島の場合には朝鮮小中華意識が高まっていき、日本の場合にはいわゆる日本型華夷秩序の方向に進んでいくという、そういった展望を書くつもりだったのですが、少し話しが長くなりそうなので、やめました。その辺りのことは、実は10年位前に『半島と列島のくにぐに』という大学生向けのテキストを書いたことがありまして、そこにも触れていましたので、もう同じことに触れなくてもいいかなと思って今回は結びのほうでは展望というよりも、内容を要約するというで結論に代えることにしました。

今回の補足ですが、1年前の原稿に赤い文字で書き加えたものを、一応今の時点では最終版になるのではないかと考えています。大きく変更したところはありません。構成もほぼそのままですし、少し補足説明を加えたところが新しくなったということになります。

ただ、第1節のところでは、「朝鮮前期の東アジア国際環境」ということで、明と朝鮮との関係、明と琉球との関係、明と日本との関係を概観しておりますが、その関係を「明代における東南諸国の貢期」として、朝鮮の場合には一年三貢、日本の場合には十年一貢、琉球の場

合には二年一貢というふうに一覧表を載せることにしました。朝鮮、日本、琉球だけではなく、これは表に載せていますが、安南〔ベトナム北部〕、カンボジア、それからシヤム〔タイのアユタヤ〕、チャンパ〔ベトナムの南部〕、爪哇〔ジャワ島の北部〕というふうには、東南アジアのほうは三年一貢がほとんどであるということを目で分かるように表を入れております。

そうすれば、この8カ国の中では朝鮮が群を抜いている朝貢国であるということが分かりますし、逆に日本は10年に1回ですので、いかに日本が明のほうからは評価されていなかったのか、問題は実は倭寇にあるのですが、10年に1回で良いと書いてありますので、視覚的に表を入れたほうが分かりやすいのではないかと考えました。

今回、私はA4サイズの内紙2枚で、こちらのほうからむしろ李啓煌先生、それから韓明基先生に聞きたい質問がありましたので、それをこのA4、2枚にまとめてみました。といいますが、私のほうは国際関係といいたいでしょうか、国際関係は実は儀礼なのですが、私が国際関係を中心にして、李啓煌先生が原因論を中心に論述をするという分担の形になりました。私の論文では原因論についてはあまり触れないことにしていたのですが、こちらにおられます李啓煌先生自身の見解、あるいは韓明基先生の見解が少し気になりますので、この際ですから、ここで話を伺いたいと思いました。

これを全部読むと時間がかかりますので、要点だけですが、全南大学校史学科の朴秀哲さんが最近書いた論文の中で主張されていますのは、功名説と領土拡張説というものは実際に別個のものではないと。現在では功名説は無視されて、領土拡張説のみが通説的な位置を占めていますが、実はこの二つはコインの裏と表の関係にあると。領土拡張説を明確に指摘した資料は存在しないのですけれども、功名説に関連した史料は数多く存在する。領土拡張説の志向というものは、具体的な史料として現れる時に功名という名で表出してくると。したがって、朴さんの意見では、壬辰倭乱の原因は構造的な次元の功名と結論付けておられますが、この見解に関して、李啓煌先生はどのようにお考えでしょうか。まずは伺いたいと思います。

李啓煌 功名説の基本的な発想は、実は秀吉の功名説というものが主語になっています。

領土拡張説につきましては正確な根拠はありませんが、当時の自身の領地拡大意欲というのは関連しているでしょう。言い換えれば、功名説は秀吉の功名説で、その当時の領土拡張説と関連した場合には、戦国大名的傾向の持続という側面で話をしている部分があるでしょう。戦国大名の功名という内容についての話は、この部分は単に当該期の特徴というわけではありません。中世以来の戦争を通じて功名を得て、それにより自己の領地を拡大するというのは、基本なのだと思います。つまり、軍忠状というものが、常にそのような面を表しているといえるでしょう。このような意味からみれば、この時期にこの問題の原因を扱うことにおいて、当該期の特徴を捉えて何であるかと考えるとき、この問題が適当なのかという側面があると思います。結果的に、戦国権力から近世権力への進化の過程の中に、壬辰倭乱を位置づけざるを得ないのではないかと思います。それだけでなく、功名説を採るとしても、この当時の全ての大名が、戦争を通じて領土を拡張するという意見を持っているわけではありませ

言葉自体を朝鮮が受け入れるはずがないという事実を、日本側が知らないことはないと考えられます。もしそれを知りながらも敢行したのであれば、一つは朝鮮の力量を非常に低く評価したのか、あるいは非常に無謀であったのか、という二つのうちの一つであると考えます。

そこで私の意見は、領土拡張と関連して、それを受け入れつつも、それでも日本が明の領土を狙っていたのなら、朝鮮よりは中国の江南地方に上陸して、寧波を経て北上するほうが、当時としてはより現実的であったのではないかと、このように考えています。従って、仮道入明というのは、あくまでもスローガンで、そのような傾向はあったかも知れませんが、結果的には壬辰倭乱というのは、朝鮮の領土を狙うための領土拡張説の延長線上にあったのではないかと、私個人としてはこのように考えております。私の意見は以上です。

李啓煌 補充説明をしてもよろしいでしょうか。実は、壬辰倭乱の原因論と、壬辰倭乱の目的が何であるのかという問題は、分離して考える必要があるのですけれども、今までは、原因と目的が同一視された状態で判断されていたのが現状です。従って、前期の報告書でも、壬辰倭乱の原因・目的という項目が出ております。基本的な状態で領土拡張説だとするのなら、その原因はどこにあるのかという問題が最も重要な要因であると判断されなければならないでしょう。ですから、領土拡張説そのものが重要なのではなく、その原因がどこにあるのかという問題が基本的に壬辰倭乱の原因となるものと判断しております。

従って、外国を侵略するということが、明であれ、あるいは朝鮮であれ関係なかったのではないかと思います。つまり、秀吉の最終目的が明にあったのか、朝鮮にあったのかというのは、それ以降の話になります。ですから、私たちは原因論を分析する時に、豊臣政権の内部問題を正確に確認することが、大変重要な作業であると考えています。そのことも、初期の問題と中期の問題とで、言い換えれば、初期に言及された部分と、実際に侵入する時の政治状況ないしは様々な変化像を、非常に精密に判断しなければならないと思います。そのような意味で、壬辰倭乱の原因についての問題は、今後さらに追究されなければならない部分であると考えます。以上です。

孫承喆 壬辰倭乱の原因論について話が進んでおりますが、功名心なのか領土拡張なのか結論はできませんが、原因論に関する究明が深くなっているのではないかと思います。他の方でご質問があれば。

李啓煌 私が質問をいたします。

桑野先生から、壬辰倭乱の原因に関する問題について言及がありましたので、その問題について少し補充説明といえますか、質問をいたします。

対明外交の基本については勘合貿易体制にあり、その内容についての学説を取り上げた時、「藤木説」を引用しております。秀吉が明中心の勘合貿易体制についての理解が非常に不足しており、それにより、壬辰倭乱が発生したということをおっしゃっていました。「藤木説」において、秀吉の朝鮮理解は非常に不足していたと考えておりますが、基本的にこの問題と関連させて藤木先生が説明していることは、「朝鮮は惣無事令の対象」となる立場を取っております。

従って、対明外交は勘合貿易と理解していたかどうかは別にして、朝鮮との関係の意味について、藤木先生はまた別の意見を持っていらっしゃるのではないかと思います。藤木先生は、この問題を外交関係の重層性と表現しております。「藤木説」において、勘合貿易の根拠として提示したものは、琉球に伝達した文書を挙げて証明しています。

ですから、壬辰倭乱の原因が勘合貿易の復活とする内容では、論理的な矛盾が発生していると思えました。つまり、対明貿易における勘合貿易の復活とする側面と、その次の惣無事令における基本的な線では、統一戦略の位置としての朝鮮の位置、統一戦略の延長としての朝鮮の位置という部分があるでしょう。ですから、この問題を勘合貿易説ということで壬辰倭乱の原因として直接的に結びつけてしまうのは、論理的な矛盾になるのではないかと考えます。

もちろん、これは桑野先生の問題ではなく、藤木先生の問題だと考えております。藤木先生も、結局は勘合貿易説ということで説明をされています。従って私たちは、この問題について論理的に検討することが必要なのではないかと考えております。これに関する桑野先生のご意見がございましたら、お願いいたします。

桑野

私は勘合貿易説を全面的に押しているわけではないですね。ただ、やはり原因論についてこれまで勘合貿易復活説とか、あるいは功名説とか、領土拡張説とか、いろいろと議論が噴出してはおりますけれども、やはり一つだけというわけではないだろうと考えています。

最近読んだ本ですけども、鄭杜熙先生他編の『壬辰倭乱』、サブタイトルが「東アジアの三国戦争」とありまして、2007年の本ですが、最近、日本でもこれが1年目にして翻訳されました。日本では実は本のタイトルが少し変わっておりまして、『壬辰戦争』とあえてタイトルを変えております。

その中で、私の論文の中では、ちょっと紹介は今のところしておりませんが、ウィレム・ブート(Willem J. Boot)というオランダのライデン大学の先生が面白いことを書いておられて、『朝鮮征伐記』の中の壬辰倭乱という論文の中に、秀吉の動機に関して論及しておられます。

その先生の論文によりますと、最初の計画があつて、その実現が難しいということが分かった時に、秀吉が第2、第3の計画を着想したり、あるいは承認したりしたんだと。その秀吉の計画というのは、中国が享受している中心権力の地位を日本のものにすると。第2の計画は、朝貢関係および勘合貿易の復活や秀吉の日本国王冊封を必要とする状況を再び作り出そうとする試み。結局これも失敗しまして、それで結局、丁酉再乱といひましようか、最終的には第3の計画として、朝鮮領土の割譲を目論んで再出兵するということになります。ですから、秀吉は多分最初にいろんな計画があつて、単純に考えれば領土拡張説なんでしょうけれども、現実的にはだんだんと失敗して行って、それを修正していくことになる。ということは、複数の考えがあつてこれはもう無理だ、ならばこれで行こうというふうにやっていったという、そういう可能性もあるのではないかと。そうすれば勘合貿易説もないわけではないということになるんですけどね。これだと原因を一つに絞る必要もないような気がするんです。

須川 では、先ほど名前が出てきた『柳成龍と壬辰倭乱』。壬辰倭乱の原因ということで私も若干考えたことがございます。勘合貿易復活説というのがあるのは存じ上げておりましたが、当時、もし勘合貿易が復活したとして、既に桑野先生から先ほどお話があったように、日本というのは十年一貢なんです。ぜんぜん利益ないですよ。既に1590年代を考えれば、ポルトガル人が中国産の生糸を持って日本にしょっちゅう来ております。あるいは、中国人も、密貿易なのですけれども、日本に大勢来ているわけですね。ですから、単に貿易によって商品、中国商品を手に入れたというような経済的な動機だけで説明しようとするのはかなり無理があるだろうと。ですから、領土の拡張であったり、あるいは中国が占めている東アジア地域における優越した地位、これに対する挑戦というようなもので、やはり見ていく必要があるのではないかなと思っております。

先ほども韓先生から話があった、直接中国の都のほうを海から攻めたほうが早いのではないかという議論ですね。実は私も壬辰倭乱に関連するお話をした時に、そのような質問が韓国の討論者の方から出てきました。私が答えましたのは、当時の日本の造船および海運の技術で考えると、数万の軍勢を海を越えて渡すというのは非常に難しいのではないかと。日本からの韓国、しかも対馬を経由してということであれば、短い距離をシャトルで何度も行ったり来たりですから、かなりの軍勢を送ることも可能でしょうが、中国の寧波の方にまで数万の軍勢を送るということになると、相当の数の軍船が必要となります。それは当時の日本の水軍の能力から見ても不可能であろうと。だから、直接中国の都を攻撃するのではなくて、やりやすそうな陸路経路という道を取ったのではないかと。というふうにお答えをした記憶がございます。

私がこの壬辰倭乱原因問題に関連してお話できるようなものは以上くらいのもので。

桑野 だから、そういう意味ではやはり道を借りるというのは合っているのですよね。

船の能力があって、だから寧波までは長すぎるのですよ。ですから、対馬のほうを経由して朝鮮に行かないと中国までは行けないという。そういった現実的な船の能力からすれば、やっぱり仮途入明というのは、そうせざるを得なかったというか、別に正当化しているわけではないのですけれども、船の技術的な問題もあるのではないかと。

李啓煌 だから、目標としての明を記録した文書はたくさんあるでしょう。多いのですが、その多いということが、真実を伝えているのか、違うことを伝えているのかということでしょう。そのため内部の問題によって戦争が必要となれば、それが明であっても、朝鮮であっても関係がないでしょう。ですから、明に向かう目標を持っていたという部分について、問題を過大評価する必要はないと考えます。

韓明基 質問が一つあるのですが、日本で千字文が読まれ始めたのはいつからなのでしょう？

桑野 百濟から5世紀くらいに王仁博士ですか、そういう伝説があります。

韓明基 それなら壬辰倭乱以前から、既に千字文がかなり読まれていたのでしょう。ところで、今まず常識的な話を何かすれば、千字文を見れば、仮途滅虢という言葉が出てきます。中国の古典で、虢国に道を貸してくれ、そのようにしたら、虢国が滅びてしまったという内容がありま

す。ですから、仮道入明や仮途滅虜は論理が全く同じです。従って、おそらく私の考えでは、朝鮮の人々が仮道入明という言葉にアレルギー反応を見せたように、日本の戦争指揮部も仮道入明の話を朝鮮にした場合、まったくそれは話にならないということは十分に認知していたのではないかとこのように思います。

仮道入明という道自体を借りるという名分においては、確かに合っていますが、それが果たして名分以上のものであったのか、そのような面では、やはり明自体に越えて行くことは結果的に無理であり、すでに1592年8月からは、日本の意図が朝鮮領土側へ次第に縮小していったのではないかと、私はそれがもっとも合理的ではないかと考えています。

孫承喆 私のほうから一つだけ、主に原因説について話が続いていますが、桑野先生の発表は国際関係を、望闕礼を通じて把握しておりますが、これは非常に新しい研究方法ではないかと、このように考えております。ところで、一つお聞きしたいことは、壬辰倭乱直前、そして壬辰倭乱当時、その次に壬辰倭乱の後にこの望闕礼というのがどのように変わってきたのかということをお聞きしたいというのが一つ目の質問です。もう一つは、最近修正して送られた赤字部分を見ると、秀吉が冊封使を日本に呼びましたが、秀吉が冊封に対する心境はどのようなものであったのかという内容が、はっきりとしていなかったように思いますので、その2点だけ、簡単に説明をお願いいたします。

桑野 まず、壬辰倭乱以前、それから壬辰倭乱の最中、それから壬辰倭乱以後の望闕礼の特徴というか、変化があるのかということですが、壬辰倭乱以前については、実はちょっと難しいところがありまして、『宣祖実録』自体が、記録が抜け落ちているんです。ただ、抜け落ちている中でも、少なくとも表の2に掲げましたが、大体定期的にはやられていると。記録の上で残っている現存史料だけでもこれだけはあるということになります。壬辰倭乱中ですと、これが特に漢城を奪還するという頃からずいぶんと、これまで以上に熱心にこの望闕礼をやるようになっていきます。特に「再造の恩」というのを強調するようになってきます。

壬辰倭乱の後になりますと、もっと、本来はこの望闕礼というものは中国の皇帝の誕生日、皇太子の誕生日、お正月、それから冬至、この4回やることになっているのです。ところが、それが本来の規程なんですけれども、例えば、宣祖39年の4月には千秋使、つまり中国の皇太子の誕生日を祝う使節を北京に派遣する際に、この望闕礼を行っています。史料でいうと56番目です。それから同じ年、しかも同じ月の3日後の4月29日には聖節使を北京に派遣するのですが、その時にも望闕礼をやっているのです。例外的なことなんですけど、これは本来の規定にはないもので、ですから、明の皇帝に対して恩義というものがだんだんと増幅された結果ではないかと考えています。

そして、私がなぜこの問題を取り上げるつもりになったのかということなんですけれども、朝鮮王朝後期のいわゆる小中華意識というものの原型をちょっと探してみたいということがありました。朝鮮王朝の後期になりますと、朝鮮の国王は明の最初の皇帝である洪武帝、壬辰倭乱の時に援軍を派遣した萬曆帝、それから明の最後の皇帝の崇禎帝、この3人を祭る儀礼を昌徳宮の裏に大報壇という施設を作って、そこでやるんですね。そういう発想がどこから

来るだろうか。突然、朝鮮後期になって明の皇帝を祭ろうという場合に何かやっぱりモデルがあったと思うんです。それが私は実は望闕礼という儀式ではないかなと。これをずっとやっていたから自然と、後の朝鮮王朝後期にも文禄・慶長の役の記憶というものもあって、しかも明が滅んで清が出てくると、そういったアジアの動きの中でわれわれが実は中華になったんだという。そういったことで朝鮮中華意識が高まるんですけど、その原型はずっと探っていくと、こういった儀礼をずっとやっていたから、朝鮮王朝の後期の大報壇の祭祀につながっていくのではないかと、そういった仮説的なものがあった、この問題を取り上げるようにしたわけです。

それから、もう一つの質問が実は難しいのですけれども、冊封使をなぜ秀吉が受け入れたかということですが、おそらく秀吉は冊封というものが分かっていないので、冊封使の意味も分かっていなかったのではないかと。冊封されるということは、明の皇帝の臣下に入るといって、そういったシステムが分かっていなかったのではないかと。文禄・慶長の役の直前には朝鮮から通信使が来ています。それもすり替えて来ているんですが、それを彼は服属使節だと思っています。講和条件が整ったところで、一応冊封使が日本に来て、秀吉の前に来るんですけど、ひょっとして秀吉はかつての朝鮮の使節を服属使節と勘違いしたように、明からの使節も服属使節だと勘違いしたのではないかと思います。ですから、喜んでガウンを着たり、喜んで帽子を被ったりと、有頂天になったというのが、やっぱり冊封の意味が分かっていなかったからではないかなと思います。ただ、その秀吉が冊封使をどう見ていたかという記録がどれくらい残っているか、そこが問題ですからあくまで私の想像の域を出ないというか、そういった弱点はありますけれども。そうすると、正式な記録以外に残る戦記物とか、そういった中で探る方法しか、もう手段はないと思います。ただ、そうしてもやっぱりそれはあくまでも軍記物ですから歴史とは違いますので、なかなか秀吉が何を本当に考えていたのかというのはちょっと難しいような気がします。

孫承喆 はい、よくわかりました。時間がかなり押してきました。今11時半ですので、まとめをしなければなりません。

第2主題の関心事が、壬辰倭乱前後の国際関係、そして原因の問題でありましたが、既存の研究史を整理し、お二人の委員の先生による発表を通じて、結論を下すことはできませんでしたが、原因の問題についてかなり深く掘り下げた討論を行うことができたのではないかと、このように考えております。

特に望闕礼だとか、あるいは秀吉の冊封問題を通じて、当時の国際関係、あるいは国際認識がどうであったのかということについても付随的に検討ができ、また、原因問題に関しては「仮道入明」とか、あるいは功名心だとか、領土拡張説、勘合貿易説などについて、相当深く討論が行われたと考えております。おそらく継続して共同研究ができれば、次回には、これらの問題がより深く扱われるのではないかと、このような期待をしながら第2テーマに関する座談会を以上とさせていただきます。ありがとうございます。

第3主題をめぐって

孫承喆 最後に、3番目の主題の座談会を始めたいと思います。

第3主題は、「17-18世紀の東アジア世界と韓日関係(通信使と倭館の意味を含む)」となっています。この主題に関しては、研究史は日本側だけということで「倭館の研究史」を山口氏が発表をなさり、主題の発表に関しては、須川先生と韓明基先生の発表がありました。

それでは、まず須川先生と韓明基先生の補足説明を聞いてから、座談会に入りたいと思います。

須川 では、時間もだいぶ押していますので短めに。

日本での17、18世紀の東アジア海域、そこでの日韓関係の研究ということなのですが、今までそのような分野を研究してきた人達は基本的に日本史の研究者であったと思います。70年代位までの日本の対外関係のイメージというのは、基本的には江戸時代は鎖国をしていた、しかし、長崎では貿易も行っていた、というようなイメージであったと要約できると思います。ところが80年代に入ってまいりますと、例えば、田代和生先生の対馬、朝鮮の貿易の研究ですとか、あるいは荒野さんの「四つの口」論ですとか、いろいろな研究が新たに提示されるようになり、単純な鎖国イメージから、日本は制限的な対外関係をちゃんと持っていたんだと、そこから海禁というような言葉が使われるようになってきました。

ところが、今度は90年代の後半になってまいりますと、ウォーラーステインが提示したグローバル・ヒストリーというか、流通面からの地球的な規模の交易、そのような分野、研究動向に影響を受けて、あるいはそれを受け入れて、特に16世紀半ばからの銀、これが注目されるようになってきています。それが急速な商業の活性化を東アジアにおいてもたらし、それが17世紀の末くらいになると再びまた安定的になるというようなことが近年議論されているわけです。

ただ、私はもともと経済史というのをやっている人間で、今回の主題がもともと自分のやっているものとはかなりずれているところもありましたので、勉強には苦労したんですけども、やはり日本での研究というのは、どうしても経済関係、あるいは対外貿易関係、その研究が非常に多いのではないかという、そういうイメージを抱くようになりました。

ところが、それに対して、実際の17、18世紀の日韓の関係というのを考えてみると、もう少し違う角度が必要ではないのかなと考えております。既に佐伯先生の報告などでも指摘が出ていたところなのですが、中国を中心としている同心円的な華夷秩序という従来の図式、これは長らくそういうものだとして受け入れられてはいたわけですが、しかしそんな単純なものではなくて、それぞれが自分のところを中心にそれなりの華夷秩序的意識、上下位相関

係を描いていたのではないのかということを考えるようになっております。ことに日本の場合には、例えば中国の礼部、朝鮮での礼曹に相当する外交儀礼を担当する役所が江戸幕府には存在しません。そうだとすると、当時の日本は外交というものをどのように理解していたのか。また、幕府の中樞が抱いていた国際関係、秩序意識というものはいったいどんなものだったのか。そして、幕府が直接に関係を持っているのは、実はオランダ人だけなんですね。中国とは正式な国交がないけれども、長崎に来る中国人と貿易を行う。しかも、この貿易の幕府の代理人のような形で貿易を担当し、あるいは外交というか、実務的な部分ですが、それを担当しているのは唐通事という世襲的な役人なのですね。面白いのは、彼らは実は中国人の出自です。

「四つの口」ということで申し上げますと、松前とアイヌ、これは松前藩に任せっきり。朝鮮との関係は基本的には対馬が担当する。琉球との関係は基本的に薩摩が担当する。そうすると、直接に幕府の地位のある長崎奉行のような役人が指示を出して、あるいは途中に間の人が入りますけれども、関係をいろいろと持ったり、あるいは直接将軍のところにご挨拶にくるといのは、実はオランダ人だけなのですね。このオランダ人の幕府による位置づけというのが、累代の臣下であると。そういう幕府の外交、あるいは国際関係のあり方というのは、例えば朝鮮王朝が考えているような外交のあり方、あるいは中国王朝が考えているような外交のあり方というのは相当に異質なものであるのかということに気がつきました。ちょっと、そんなことを追加点の一つとして伝えたいと思います。

もう一つ、その後ちょっと勉強して気がついたことなのですが、17、18世紀、特にキリスト教の禁止、あるいは外国人との間に生まれた子供、特に西洋人との間で生まれた子供をルソンに追放するというようなことを17世紀初めにやっております。17世紀という時期がそういう中で幕府の威光というか、幕府の支配下にある、その支配に従属する者たちということで日本人というようなものを形成していく時期だったのかなというふうにもちょっと考えております。これを韓国のほうで考えてみると、17世紀初めの蔚山の戸籍を見ますと、本貫〔先祖のゆかりの地〕が黒龍江だとか、大元だとか、あるいは降倭というような出自が異なるような人達を蔚山の戸籍に見ることができます。

ところが、その後の17世紀末、18世紀の戸籍にはそのような人達はおりません。また、壬辰倭乱の記憶というのが残る中で、釜山の倭館には女子が絶対に関わってはいけないと。もちろん中にあるのは対馬からきた男達ばかりで、かつ、朝鮮女性とその男達となんか関わりがあったらば死刑に処されると。ところが、それ以前の例えば三浦に倭館があった時代、そこまで厳しかったらどうかというのはちょっと疑問に思います。やはり韓国においても、17世紀ごろに韓国朝鮮人というか、韓国人というか、単なるエスニック的な、例えば話す言語とか、服

装というのではなくて、なんらかの共通意識のようなものが形成されていくのではないのかという気がちょっといたします。

これが2番目なのですが、2番目の話はまた全然実証的な話ができるものではなくて、今後考えていきたい課題というようなものです。私からの追加的なお話は以上です。

孫承喆 ありがとうございます。韓先生。

韓明基 はい、私も主題は須川先生と同じですが、すでに17、18世紀の問題については、日本と韓国で韓日関係史研究者たちによる多くの研究があります。倭館と通信使を軸にした既存の研究は非常に多くあり、それらは概して韓日関係、韓日あるいは朝日関係を軸として、倭館と通信使の発生から展開、そして、終了過程まで、相当詳細な説明がすでになされています。

そこで、私はこのような既存の研究成果に依りながら、論旨を展開させましたが、それとは全く異なる、新しい成果を加えることは難しい状態です。そこで、従来の研究者がそれほど深く関心と努力を傾けてこなかった異なる側面から、倭館と通信使の問題に接近してみようと思っています。それは具体的に申し上げれば、朝鮮の置かれた地政学的な条件というものにより注目をし、17世紀の大陸における明清交代が、朝鮮の対日関係に及ぼした影響を考察することです。もう少し具体的にいいますと、17世紀の大陸における明清交代が、朝鮮の倭館対策、そして通信使の問題についての対応から、どのような具体的な影響を及ぼしたのかということについて考えてみました。

壬辰倭乱を経て、朝鮮は日本関係を広げて行きますから、明清との関係を特に考慮しないわけにはいかなかったのです。それは、ご存知のように、日本に対する敵愾心がとても大きかったにも関わらず、1609年に国交を再開して、光海君政権が融和的な対日政策を取ったことにはっきり表れているといえます。そこで私は、対日敵愾心が緩和され、さらには逆転される状況に関連して、朝鮮での仁祖反正・丁卯胡乱・丙子胡乱にとりあえず注目しようと考えました。

最近確認した資料によれば、1619年までも、朝鮮においては、対日敵愾心が対女真だとか、対清敵愾心よりはるかに高いということが分かっています。ですけれども、確実なことは、やはり仁祖反正・丁卯胡乱を契機として、対日敵愾心はかなり下がっていき、清に対する敵愾心が表面化してくることが確認できます。そこで、まずは二つの戦争・胡乱を契機として、対清敵愾心と対日敵愾心が逆転するという側面をより具体的に検討しようとする計画を持っております。特に、丙子胡乱を契機として、対日敵愾心は相当部分減っていき、対清敵愾心が社会全般に広がり、それが北伐であるとか清に対する対抗政策を繰り広げるということをもた確認することができました。このような具体的な側面を、当時の主要な人物の文集だ

とか、あるいは彼らの発言などを通じて確認することで少し補充してみたいと思います。

ところで、朝鮮の対清関係がある程度安定した時期となる18世紀以降になると、やはり対日敵愾心と、対日関係の重要性を再び考えようとする議論が表面化していくことがわかります。漸次補完をし、具体的に説明を申し上げれば、いわゆる北学というものが登場するとき、対日認識、あるいはそれとかみ合う対倭館政策、対通信使についての対応はどのような方式に変化したのか、そしてそれがどのように連動していたのか、それらをさらに検討したいと考えています。そして、既存の研究ではあまり関心を集めてこなかった、朝鮮の倭館に対する認識、あるいは政策、このことを連結させて対日政策と対清政策、そして対日認識と対清認識が相互に密接に連動しているという一種の仮説を立てて考えていきます。

このような作業を通じて、17、18世紀の東アジア三国の関係がお互い密接に連動していたという側面をもう一度考え直そうという意図を持っております。以上です。

孫承喆 はい、ありがとうございました。お二人の先生による補足説明がありました。他の先生方から、お二人の先生へ質問をしていただきたく存じます。

佐伯 一つ、韓明基先生に質問します。

韓明基先生のご報告は日韓関係を東アジア全体から捉えようという非常に幅広い視点で捉えられておりまして、非常に勉強になりました。特に朝鮮の日本に対する政策、あるいは倭館に対する政策が、朝鮮の対清関係と密接な関係があるということを説明していただき、大変勉強になりました。

そういう大きな視点から、倭館を位置付けるということは成功されたと思いますけれども、もう一つ、倭館そのものを微視的、小さな視点から見るというやり方もあるかと思います。例えば、倭館においては、日本人の通訳と朝鮮人の通訳が実際の外交とか、貿易を実質的に動かしているという側面もあるのではないかということです。そういう微視的なところをどういふふうに位置付けられているのかということをお聞きしたいと思います。

韓明基 佐伯先生、ご質問ありがとうございます。おっしゃったように、倭館というのは朝鮮の対日政策における重要な窓口の役割を担い、朝鮮に居住する日本人を統制して規制する場所としての意味については私も同意しております。ですけれども、やはり時間が経つと人間の生活というものは、政府の次元で規制や統制する場所であっても、必然的にその地域の住民同士で接触し、お互いが結びつく場所としての機能も持続していったと考えています。

一つ付け加えたいことは、やはり朝鮮は、実質的には倭館の存在を実際は好ましくないものと思っており、それは後の時代まで同じだったようです。なぜなら、やはり倭乱の記憶というのが相当長くあったために、倭乱の記憶にも関わらず、内外の様々な悪条件のために、仕方なく倭館を維持しなければならないという考えだけは、20世紀までも変わらなかったと、私はこ

のように考えております。以上です。

李啓煌 須川先生の発表をお聞きしまして、グローバル・ヒストリーの観点から、いろいろと学ばせていただきました。また、見過ごしやすい問題点も教えていただき非常に有用でした。大変勉強になりました。

私たちが壬辰倭乱以後の韓日関係について話す時、日本史立場からの説明の仕方、普通日本での語り方についての問題を考える時、対外観を考える時、「日本型華夷意識」、朝尾直弘先生の1960年代の作品ですが、これからいわゆる「日本型華夷秩序」、荒野泰典先生の観点への移動、それから「鎖国問題論」に対応するもう一つの「四つの口」論があります。

朝尾先生がこのような問題を提起した方法は、実は日本国内を統治することのできる能力、武威という概念と、武官という概念を同時に使って、この問題は実は内向の論理、日本人に対する論理としての提起でありました。これがどのような形態なのか、「日本型華夷秩序」に転換されるものが荒野泰典先生の観点です。

朝尾直弘先生と荒野泰典先生の基本的な共通点は、明と対置する日本、すなわち、明と日本の対等という点を基本にしていると考えられます。そのような構造の中で、日本と朝鮮の関係は、日本が優越した地位にあるという内容がとりあえず基本となっています。このような内容が華夷秩序論に移ると、結果的に日本と朝鮮の位置は、日本が優位な立場にいるという内容になっています。秩序という言葉は、実は実質的で現実的なものでありますので、相互の規定性について問題があるのではないかと思います。そのような立場から、「四つの口」論を主張しています。

朝鮮の場合も、実は小中華意識の立場を表明しているというのも事実です。例えば、壬辰倭乱後の国交再開におきまして、対馬は羈縻の位置に立っています。従って、佐伯先生が主張されている小中華意識というのは、非常に重要な部分で、今後も検討されるべきではないかと思います。しかし、実際に日本と朝鮮は対等外交であったと判断することができます。

そのような意味から、「四つの口」論が、並列的に叙述される場合、いわゆる明と日本の対等性、朝鮮と日本における日本の優位性を基礎として叙述されていることを認めざるを得ないのです。そのような意味で、日本との対等外交というものを十分に考えるのであれば、「四つの口」論の叙述は、より慎重に行われるべきではないかと思います。日本型華夷意識の立場で、日本が朝鮮より優位に立っているという内容は、それ以前の段階にもすでにあったことで、通信使の位置を朝貢使と位置づけているものと関連しています。

そのようなことから、朝鮮は対等外交を展開しながらも朝貢使と位置づけられるのは、日本内部の問題、日本国内の要因から、その原因を探さなければならないと思います。そのよう

な意味で、日本国内における朝貢使の位置は、内部のどのようなところと関連付けられているのか、言い換えれば、国内的な要因は何であるのかを見ることができるのかというところが非常に気になるところです。このようなことについて、教えてください。

須川 適切な答えができるかどうか分からないところなのですから。

幕府の一般に対する説明というか、一般に対する話のあり方では、やはり公儀のご威光が海の彼方隣国まで及んでおると、という考え方なのですね。ところが、実際の様々な外交の場面では対等にやっていますし、それどころか、むしろ18世紀初めに新井白石が指摘しているように使節などへの待遇が分を越えているとの意見もあります。また、日本から送るさまざまな連絡の手紙を老中の名前で書いて朝鮮側では礼曹参判〔次官〕宛てになっています。老中というのは、朝鮮に行けば領議政、右議政、左議政と匹敵する官職であるのだから、議政宛てに出すのが正しいのではないかと。つまり、朝鮮と明の外交関係では、朝鮮側の礼曹が中国の明に外交書簡を送る時には、その下の職位の人間に送るとというのが礼儀です。ところが、逆に日本の場合は、上の立場のものが下の立場の人間に送って対等な関係であると言っていますから、これはおかしな話なのですね。むしろ、行われている実際の外交の手続きは、東アジア的な常識の中で、儒教的な感覚の常識の中では、日本のほうが格が下がることになります。また、将軍の称号を大君と定めたこと。これは「大樹源君」の略であるというふうに言われていますけれども、実は大君というのが朝鮮では国王の王子である正嫡の王子の称号です。それをまったく知らなかったと言えるかどうか、これもちょっと怪しいところがあります。ですから、日本のやっていることというのが、国内では何か朝鮮通信使は朝貢の使節であると説明はしている、あるいはそのような意識を持っているかも知れませんが、東アジアの他の外交の慣習に照らしてみると、日本はむしろ朝鮮よりも一つ下で朝鮮と通交をしているという大変矛盾していることが起きています。そういうものもひっくるめた上で、とりあえずは対等なのだろうということになるのです。琉球に対してはまったく異なりますので、実際に服属させていた琉球に対しては違う扱いをしています。ですから、朝鮮に対して下であるように言っているながら、実際は対等あるいは自らが下の待遇で日本は朝鮮と国交をしていたというのが事実ではないかと思います。

孫承喆 ますます話が難しくなっていくのですが、最後まとめの段階で、私は一つだけ申し上げたいと思います。

以前の論文、須川先生がご発表されたときも、私が少し申しあげまして、この補足説明のところでもお話しさせていただきたいのですが、基本的に、全体的に須川先生が論文の中でおっしゃっている通信使と倭館に、ある歴史的な意味を付与するとすれば、一言でどのように言えばよいのでしょうか。なぜなら、それこそが結論に区切りがつきそうなので、その内容

についての説明がちょっと抜けているようです。

須川 一番困った場所ですね、それが。では、簡単に。

通信使といいましても、最初に来たのは通信使ではなくて回答兼刷還使ですね。それも含めて考えると、日本へ使節団を派遣する、これはやはり極めて重要なことだと思います。つまり、壬辰倭乱という経験をして、日本というのはどういう国であるのか、きちんと確認をしなければいけない。朝鮮側にはそういう目的があったと思います。

ところが、日本側はまた違う思惑を持っていて、先ほどの話にも出ましたように、あたかも朝鮮が日本に服属していて朝貢の使節を送ってきたのだというような受け止め方があったわけです。ところが、またそれとは別の次元で、朝鮮の儒学、これに対する日本の儒学者達の関心も高いものでした。ですから、日本で日本の学者達が通信使として来た人達と、特に書記ですとか、さまざまな形で文筆担当の人が来ていますが、彼らと漢詩文を交換したり、あるいは彼らが書いた絵にまた詩を寄せたりということを盛んにやっています。今日、通信使が宿泊した寺などにも、多くの通信使が残した書などが残されています。ですから、当時の朝鮮政府の政治的な意図、あるいは日本の江戸幕府の政治的な意図とはまた別の次元で、学問や文化というものをお互いに伝え合う、あるいは違うものに対して好奇心と関心を持ち、考えてみるという極めて良い機会であったのではないかと思います。

あとは、文化的なもので倭館について考えてみると、倭館というところでの交易、韓日、日韓の貿易だけが注目されますけれども、実はあそこからいろいろと書籍も買っているはずですね。どのような形で入手したのかは分かりませんが、例えば、柳成龍の『懲毖録』、あんなものが100年も経たない内に日本に入っているんですね。あれは当時のいわば朝鮮の軍事機密に属するようなものがいっぱい書かれていますから、本来は流出してはまずいものなのでしょうけど、やはり倭館を経由して日本に入り、かつ、そこで日本で印刷されて大勢の人が見るようになっています。

そういうような側面もあったということを話しておきます。

孫承喆 もしですね、幕府で通信使を朝貢使だと考えていた人、そういう考えを持つ人がいるならば、そのような人たちは倭館の存在をどのように見ていたのでしょうか？

桑野 日本人町。

孫承喆 同じ時期に東南アジアに日本人町がずっとありましたが、それとは異なる認識をしていたのか、どのように考えていたのか知りたいのですが。

須川 違うのですね、多分。

これ田代先生が書いたものなのですから、倭館に、日本から対馬の使節が行きます。そうすると東萊の客館ですか、そこでもって殿牌に対する儀礼をやりますね。それはあたかも

対馬からの朝貢使節という形になるわけです。ところが、それが幕府の中でもちょっと問題になったようで、しかし、あれは勝手に対馬がやっていることであって、幕府のご威光には関わりが無いという見方をしていますね。ですから、ある統一的な儀礼の秩序というのが幕府の中心部にきちんと礼の秩序が存在して、それによっていろいろな外交がちゃんとランク付けをして行われているというよりは、その時、その時の関係のまま、ですから、先ほど申し上げたような朝鮮を下に見ているように思いながら、実は外交の儀礼的には日本のほうが下になっているというような、矛盾したことが平気で行われていると思います。

李啓煌 それについて、私も対外関係の形成過程というところで、論文を実は書いていますが、まだ発表はしていませんけれども。壬辰倭乱以後の東アジア世界というものを把握するとき、いわゆる冊封体制なのか、朝貢体制というか、朝貢使なのか、このような問題よりははるかに現実的な外交、利益を中心にする外交に転換されていったということが重要で、その問題が壬辰倭乱の持っている大きな意義で、それによって東アジア世界は変形されたという判断を下し、それによって幕府の世界を説明するのがよりよいのではないかと考えています。

孫承喆 私はそこで、そのような場合に、朝鮮と日本の外交の実態をお話すれば、朝鮮王朝は、実は外交政策がある程度、枠が定まっていたのではないのでしょうか。ところが日本はそうではないようです。必要ならば実利を主張し、また必要であれば偽りをいう、これが併存するということですね。そこが非常に混乱します。ですから、このように見れば矛盾であり、このように見れば現実的であるとか、そういったことを定義するのはとても難しいのですが、それらを明確にしてくれれば、朝日関係の外交が見えてくるように思うのですが、このところが、いつも判断が難しいです。

須川 実は、夫馬先生ですか、の研究で出てくるんですけども、清朝が冊封をしている国というのがいくつあるのか。琉球と朝鮮とベトナムでしたっけ、それだけでした。3つです。

桑野 もう1つ、シャムが。

須川 あ、シャム。

ところが、その時期に、シャムはぜんぜん儒教的な秩序なんか関係ない国ですし、ベトナムはベトナムで、自分の国では皇帝といって大越国ですね、皇帝で、独自の元号も使ったりします。琉球はというと薩摩の攻撃以後、日本に従属する形になっています。

ですから、清はそういうことを分かっているながら、とりあえず冊封の国と数えているわけですね。ですから、むしろ冊封体制というようなものをきちんと概念化し、図式化し、その中で自分を位置付けて、このように行動すべきだというようなガイドラインをちゃんと作っていたのは、おそらく朝鮮だけではないのか。他はそれぞれ自分勝手にやっている。いわば、先ほどから出てきた華夷秩序といっても、かなり虚構の上に成り立っている。ただ、外交の場では

お互いそういうものを国際法ではないですけども、一応、ルールとしては尊重をしよう。ただ、それに拘束力があるかどうかは別であるというふうなものではないのかなとちょっと思っております。

桑野 今の夫馬先生の論文は私の増補版の注釈の5番で引用しているのですけれども。

増補版、もしお手元があれば、2ページの下に注釈の5番があって、「一六〇九年、日本の琉球併合以降における中国・朝鮮の対琉球外交」という論文です。「東アジア四国における冊封、通信そして杜絶」というサブタイトルまでついていて大変刺激的な論文です。夫馬先生によれば、清代の冊封国というのは朝鮮、ベトナム、琉球、3カ国だけであって、かろうじて、せいぜいシャムを加えた4国に過ぎないといっておられまして、これは貴重な意見ではないかと思えます。ですから、もう少し遡って、私の場合、明代ですね、朝鮮王朝の前半期の冊封体制というものもやはり怪しいのではないかと。かなり虚構の部分があって、中国の方では、明のほうはそう考えているだけであって、現実がどうであったかというのはまた別の問題になってくるのではないかと思えます。

それから、一つ韓明基先生に質問したいのですけど。これは簡単なことですけど、韓明基先生が論文の中で一つ富山大学の鈴木信昭先生の論文を引用されていて、「李朝仁祖期をとりまく対外関係」、サブタイトルが「対明・対清・対日政策をめぐって」という論文があります。その結論のところ、鈴木先生によれば、仁祖時代の対日関係は当時もっとも重要な課題ではなく、常に対明、対清関係の延長線の上から決定されたものであるということとをまず一つ指摘されておられます。ただし、鈴木先生の場合には、倭館貿易については今後の課題であるというふうにご本人も断っておられます。

そうすると、研究史の上で考えてみると、今回の韓明基先生の論文は鈴木先生がやれなかった部分を継承したような形になるのでしょうか。

韓明基 それをもう少し具体的に説明してください。

桑野 今後の展望として、倭館貿易のことも考えたいというふうに締めくくっておられるのですけど、研究史の流れでいうとどうなるのかなと思って。

韓明基 鈴木教授の論文は、私は引用程度で見たのですが、鈴木先生のおっしゃっていることとは、少し違った次元の話を考えています。私の考えている内容ですけども、倭乱以降の対日関係というものが、先ほど申し上げたように、相当敵愾心で占めていき、仁祖反正・丁卯胡乱、このようなこと自体が朝鮮内部の問題ではなく、中国との関係よりとても大きな問題であったために、事実上倭乱以降17世紀はじめまで、朝鮮に加えられた大陸からの外的圧力は、非常に大きなことであった、ということとをまず念頭に置いています。ですから、朝鮮の第一義的な課題というのは、大陸からの外圧にどう対処すべきかというのが一番大きな問題であって、

対日関係はそれに付随される問題であった、私はそのように考えています。

桑野 ありがとうございます。

須川 たぶん政治的には中国との関係がもう第一義的で、日本との関係というのは、とにかく攻めて来なければ良いというような程度で、あまり大きな問題ではなかったと思います。ただ、経済的に見ると、ちょっとまた違う側面が出てきて、例えば中国が売ってくれないさまざまな南方産の物資、例えば牛の角ですね、水牛の角。これは、弓の材料にします。これは武器の材料なので中国側が輸出を認めない。代わって、倭館の、対馬の人間が朝鮮に持ち込む。そのための牛角契というのが出来ていますね。あるいは銅、17世紀、1678年から肅宗代、大量に銅銭、常平通寶の鑄造を始めますけれども、実は材料となる銅は倭銅です。18世紀の末になると国内でも銅山が出てきますが、たくさんの銅銭ですね、それまで朝鮮で銅銭の材料になるのが実は倭銅であると。ですから、政治的な関係で見ると、あんなものはなくしてしまいたいと思いつつも、やはり当時の朝鮮政府が必要とするさまざまな物資の実は重要な供給源でもあるということと言えます。

韓明基 先ほどの桑野先生の質問中に、経済的な側面に対してお答えすることができなかったのですけれども、申し上げたいことは、須川先生の意見に大部分同感します。一つの例として、朝鮮の17世紀半ば頃までは、明・清・日本、そして、またミクロ的には鉄山沖の椴島、この4か所に対する経済的関係が連動しているために、やはり貿易関係が重要ではないという話ではないという事実を喚起させて申し上げます。

孫承喆 時間がかかり経過しております。ある程度今のお話を整理したと思います。今日が実は、第2分科会の公式的な共同研究会議は今日が最後です。そこで、これまでの2年間の共同研究活動について、委員のみなさまのこれまでの感想というか、お考えをお話ししていただければと思います。一言ずつお話された後、座談会および共同研究活動を終わりにしたいと思います。特に、お座りの順にお話をしていただければ、私が最後にまとめて終わらせるように致します。

桑野 今回は「東アジア世界と文禄・慶長の役」というテーマの下に研究活動を続けてきたわけですが、私の場合には、これまで実は日朝関係というよりも朝中関係のほうに関心がありました。今回、もう少し広げて明と琉球との関係、あるいは明と日本との関係というふうにも、もう少し幅を広げて考えることによって、大変自分でも勉強になったなと思います。特に朝鮮王朝の位置を考える場合に、琉球というものがすごく大事な、大きな役割を果たしているというのが分かります。ちょっと一言では言えませんが、例えば、燕行使といいたいでしょうか、朝鮮から中国に使節を派遣する、同じようにやっぱり琉球も使節を派遣しています。で、明からは冊封使が来るというのも、やはり朝鮮もそうですし、琉球もそうですから、朝鮮と琉球を見

て行くと、もう少し東アジアの中の朝鮮王朝の位置づけが分かってくるのではないかな、と今考えております。

須川 この共同研究を通して、やはり韓国と日本の歴史に対する関心の持ち方、その違いというものをより具体的に感じることができました。また、それぞれの研究史の整理の中で、どういものが両国の歴史学界でテーマとされてきたのか、あるいは、なぜそのものに関心を持つのか、若干分かってきたような気がします。それに基づいて考えてみますと、やはり日本の研究は日本の研究で、ある意味、日本中心的なものを見ているところがずいぶんある。これは逆に韓国の場合もそうなのかなと思いますけれども。そういうのをお互い今回かなり相対化しながら、お互いの見方の違いということに気が付き、かつ、理解し、その間に議論ができる道を見つけることができたと考えております。どうもありがとうございました。

佐伯 今回、日本のたくさんの研究者、そして、韓国のたくさんの研究者の研究報告を聞かせていただきました。日本の研究者からは違ったジャンル、時代、そして、テーマのお話を聞いたわけですが、非常に幅広い知識を得ることができました。また、韓国の先生方の研究報告をたくさん聞くことによりまして、史料の違い、これは当然ですが、歴史を見る視角の違いというものを知り、大きな勉強になりました。そういった広い知識や視角、異なった方法というものを、今後自分の研究の中に生かしていきたいと考えております。どうもありがとうございました。

李啓煌 桑野先生、須川先生、佐伯先生がお話して下さいましたけれども、全く同感です。それに加えて申し上げれば、先生方とお会いして、様々な楽しい思い出とか、ご高見を伺うことができたということ大変嬉しく思います。そして、もう一つ、問題はいずれにしても私たちが東アジアというものについての同一性ないしはそれらと同一の追求点、そのような点は共感することができました。今後も数多くの学問的交流をしていきたいし、またそうなることを期待しております。ありがとうございました。

韓明基 私も皆さんがおっしゃったように、歴史対話が大変有益で、楽しい経験だったとっております。この共同研究委員会の出発は、また別のきっかけを通じて行われましたが、学問的にお話することができたというのは大変重要な機会であったと思います。そして、これから考えていくことは、倭寇、壬辰倭乱、倭館、通信使のような基本的な争点について、立場の確立も重要ですが、これからは、このような問題を包括する立場から、韓・中・日三国の歴史像を具体的に、総合的に描き出す時期になったのかなと思います。そこで、それと関連して、東アジア三国の具体的で躍動的な関係、そしてそれとかみ合わさっている関係認識についての研究を新たにはじめ、それを帰納することが必要なのではないかと、そんなことを考えております。もう少し具体的に申し上げれば、これからは冊封体制という枠組みを超える新たな構造

や枠組みを考える時期になってきたのではないかと考えております。

孫承喆 ありがとうございます。私たち第2分科会に与えられた主題は、中近世韓日関係史の分野の共同研究でした。特に争点となる主題である倭寇だとか、壬辰倭乱、通信使、倭館、これらのことを中心に、とても包括的に期間中、共同研究が進められたと考えています。そこでは、争点となる主題だけでなく、幅広く研究史の整理を行い、また主題の発表論文を書き、何よりも史料解題集を出したことは、今後この分野の研究に大きな寄与をしたのではないかと、そのように考えております。それなりにいくつかの成果を申し上げれば、まず重要な争点となっている倭寇の構成について韓日両側で相当に近い意見・見解が提示され、そして壬辰倭乱の原因についても、より具体的に深く扱うことができ、倭館と通信使の問題も、東アジア全体の枠組みの中で見てみようとし、そして何よりも、現在韓日関係史をみる視角を、より新しい方法で行わなければならないのではないかと、たとえば、冊封体制論に対する認識であるとか、これらについての新しい方法、また倭館や通信使をみるときにも、マクロ的、ミクロ的な観点から見つめるべきではないかという色々な提案があったと思います。このような提案は、今後報告書が発行されれば、多くの研究者に新たな研究の契機となるのではないかと考えております。私たち第2分科会では、この期間、基本的にお互いがお互いを理解し、信頼し、尊重しつつ、深度ある研究が進められ、そしてこのような研究活動を通じて友情も芽生えたのではないかと考えています。そして今後も継続される韓日間の歴史の対話に、一つの共同研究のモデルとなったのではないかと期待しています。また現在進められている韓日の歴史的葛藤の解消についての一つの契機となればという願いを共有しながら、これまでの研究活動を終わらせていただきたいと思います。大変お疲れ様でした。ありがとうございます。